

Cultural Heritage Management and Tourism in Developing Countries from a Standpoint of Archaeological Conservation : From the Experience in Project for the Preservation of Gandhara Monuments in Pakistan

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 増井, 正哉 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001703

遺跡保存の立場からみた発展途上国における 文化遺産管理とツーリズム

パキスタン・ガンダーラ遺跡保存プロジェクトでの経験から

増井 正哉

奈良女子大学

Cultural Heritage Management and Tourism in Developing Countries from a Standpoint of Archaeological Conservation From the Experience in Project for the Preservation of Gandhara Monuments in Pakistan

Masaya Masui

Nara Women's University

本論文は、1995年からパキスタン・ガンダーラ遺跡保存に携わってきた筆者の経験から、その保存整備とツーリズムの現状を明らかにし、発展途上国における文化遺産管理とツーリズムの問題を検討しようとするものである。ガンダーラはパキスタン北西辺境とアフガニスタン東部の古名であり、独特の仏教文化を育んだことで知られ、現在でも数多くの遺跡がのこる。ただ、①一部の有名遺跡のみが観光資源として保存整備の対象となり、多くの遺跡が放置されたまま消滅の危機に瀕していること、②保存整備の対象となった遺跡でも、施設整備に重点がおかれ、手間の掛かる遺跡保存は後回しにされがちであり、ビジターのために十分な検証を踏まない復元が行われていることを明らかにした。つまり、文化遺産の管理とツーリズムの良好な関係はいまだ構築されているとはいえず、結論的に今後の課題を整理した。

This research clarifies current situation of conservation and maintenance, and examines the problems of cultural heritage management and tourism in developing countries from the author's experience of the conservation for Gandhara monuments in Pakistan since 1995. Gandhara, an old name for the Northwest Frontier of Pakistan and the eastern part of Afghanistan, is the area where unique Buddhist culture was developed with many remains survived till now. However, only some famous remains were conserved and maintained as tourism resources and a large number of sites were left unattended, facing danger of extinction; even those remains which became the subject of conservation and maintenance, focuses are on facility maintenance and troublesome preservation works themselves are tend to receive low priority; restoration are conducted without sufficient examination. All of these show that a good relationship between cultural heritage management and tourism is yet to be developed.

- | | |
|--------------------------------|-----------------------------------|
| 1 はじめに | 7 ラニガト遺跡におけるモデルプロジェクト |
| 2 ガンダーラ遺跡の概要 | 8 保存修復における具体的な取り組み |
| 3 遺跡の崩壊要因 | 9 まとめ——ガンダーラ遺跡における文化遺産管理とツーリズムの課題 |
| 4 遺跡の調査と保存の歩み | |
| 5 現在の保存事業の問題点 | |
| 6 ユネスコ日本信託基金によるガンダーラ遺跡保存プロジェクト | |

*key words: Gandhara Monuments, World Heritage, Restoration, Conservation

*キーワード：ガンダーラ遺跡，世界遺産，復元，保存

1 はじめに

筆者は京都大学中央アジア学術調査隊ガンダーラ仏教遺跡の総合調査のメンバーとして、1983年から1992年までパキスタン北西辺境州で仏教遺跡の発掘調査に携わり、その後、1995年からユネスコ日本信託基金によるガンダーラ遺跡保存プロジェクトの日本側チームリーダーとして、遺跡の保存修復に関わってきた。プロジェクトは1999年に当初

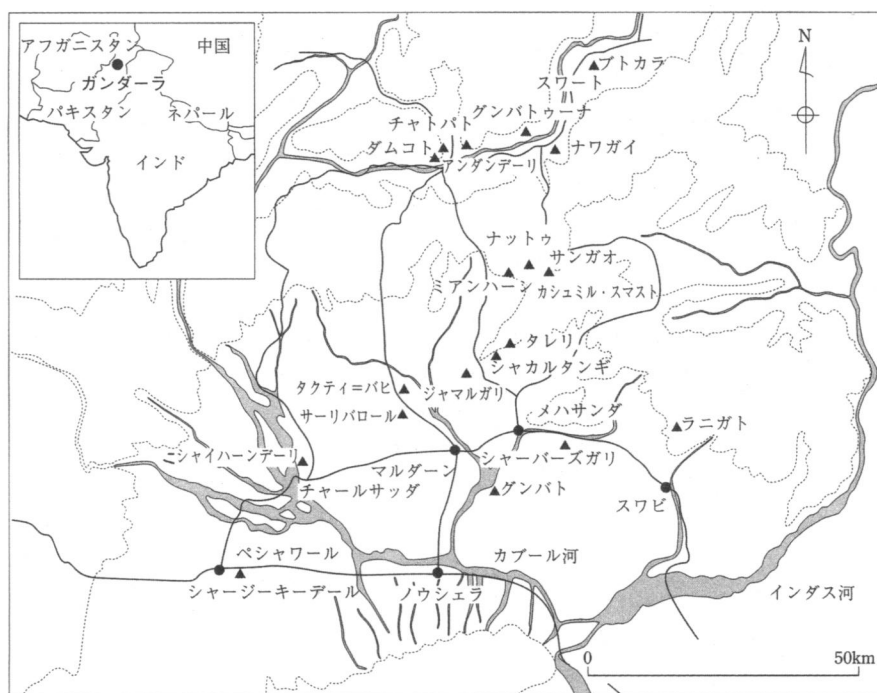


図1 ガンダーラ地域要図

の4か年事業を終え¹⁾、2000年からは、フォローアップフェイズの4か年事業がはじまっている。ここでは、遺跡の発掘調査と保存修復の双方に関わった自身の経験から、ガンダーラ仏教遺跡における文化遺産管理とツーリズムの問題について考えてみたい。

2 ガンダーラ遺跡の概要

ガンダーラはインド亜大陸北西辺境の古名である。広くはアフガニスタン、北西インドをふくめて、ガンダーラと称する場合もあるが、一般的には、現在のパキスタン北西辺境州ペシャーワル盆地をさす。この地域はインド亜大陸と中央アジアを結ぶ回廊に位置し、クシャーン朝期(AD1~3世紀)に独自の仏教文化を育んだことで知られる。フランスの美術史家フーシェ A. Foucher はガンダーラ美術を「ギリシャ人を父とし、仏教徒を母とするギリシャ風仏教美術」と呼んだ。そして、東西文化の交流に関心をもつ人びとの関心を引きつけてきた。この地域のここかしこに仏教寺院跡、都市・集落の遺跡、墓などがのこる。

地域の地形について見ると、ペシャーワル Peshawar, マルダーン Mardan のふたつの都市を中心として大きな平野が広がり、その周囲を小高い山地がとりまく。平野のところどころには切り立った丘陵がある。また、北側の高地にはスワート Swat 川沿いに広い渓谷がある。ガンダーラ遺跡はこうした地形を利用してさまざまな場所に立地する。現在知られている遺跡の多くは、平野の中の小高い丘陵上(タクティ=バヒ Tahkt-i-bahi, ジャマルガリ Jamalgarhi, メハサンダ Mekhasanda など)、周囲の山地の渓谷の入り口(タレリ Thareli, シャカルタンギ Shakartangi など)、平野周縁の高地(ラニガト Ranigat, カシュミルスマスト Kashmir-smast など)に立地している。これらはほとんどが仏教寺院跡である。あまり知られていないが、小さなマウンドの形で、平野部にも数多くの遺跡が発見されている。

遺跡の正確な数は不明であるが、1910年代に行われた分布調査によると、現在のマルダーン、スワビ Swabi, チャールサダ Charsadda の3県で約300の遺跡が報告されている²⁾。また1993年から進められている分布調査では、この3県で900を超える遺跡が見つかった、ブネール Buner 県で160、アフガニスタン国境の部族支配地域バジョール Bajour 管区でも100の遺跡が報告されている³⁾。現在までに分布調査が終了した地域は、面積比でみると、いわゆるガンダーラ地域全体の20分の1にも足りず、これからも新しい遺跡の発見がつづくと思われる。

このうち発掘調査が行われたもの35遺跡、保存対象遺跡として政府の管理下におかれているものは41遺跡であるが、うち、管理人のいる遺跡25、管理用の小屋などの施設がある遺跡はわずか19である。ただ、保存対象とされている遺跡でも、1960年代に日本隊によって発掘調査された3つの遺跡を例に見ると、管理用の小屋はおろか遺跡を囲うフェ

ンスもなく荒れるにまかせている。発掘調査の行われた遺跡ですら、こういう状況である。残念ながら未調査の大多数の遺跡はまったく無管理の状態におかれている⁴⁾。

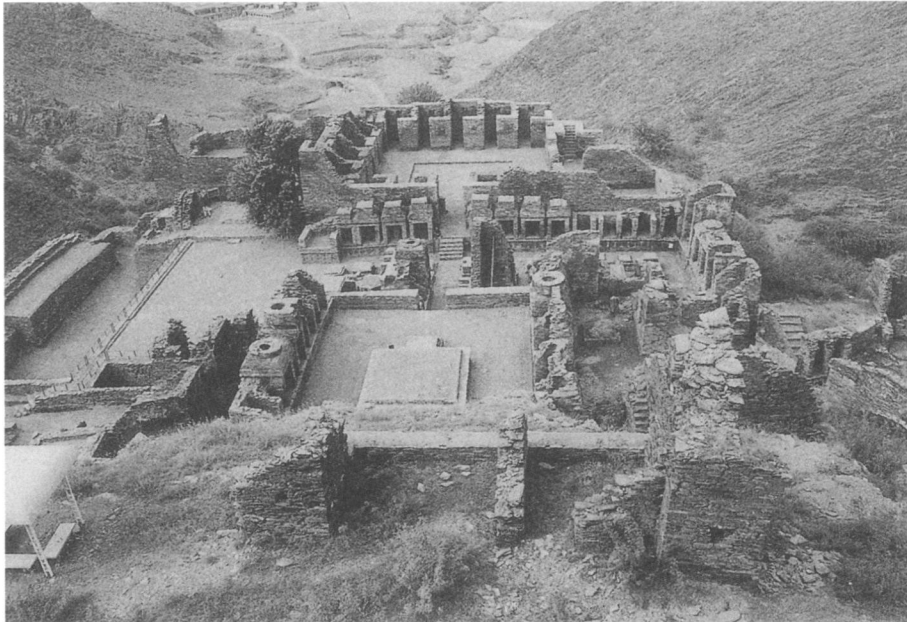


写真1 タクティ=バヒ遺跡

3 遺跡の崩壊要因

パキスタンの気候はきびしい。猛暑期には45度をこえる日がつづく。また雨期には大量の雨が降り、乾期には大地はからからに乾燥する。当然、遺跡には悪い影響がでる。ところが、ガンダーラ遺跡の崩壊は、こうした自然条件よりはむしろ、人為的な要因によるものの方が深刻である。

「ガンダーラ」の名は古くから人びとに親しまれてきた。ところがその関心はガンダーラ美術、とくに仏像などの彫刻にのみに集まり、遺跡自体はあまりかえりみられることはなかった。「調査」と呼ばれるものも、かつては石彫の収集目的のものが多かったし、当然、盗掘もさかに行われてきた。イスラム教徒である住民が仏教遺跡にとくに思いをいだくはずもなく、盗掘は一種の生業でもあった。現在ではもちろん、盗掘も盗掘品の売買も禁止されているが、当局の監視の目がなかなか行き届かず、白昼堂々と盗掘が行われるありさまで、盗掘の被害を受けていない遺跡はないといってもよい。盗掘品の流通には、ある種のシンジケートがあり、筆者の遺跡滞在中にも仲買人が買い付けにくる様子を見ることもたびたびあった。北西辺境州の州都ベシャーワル第一の繁華街・サ

ラファ・バザールには、観光客向けの骨董を扱う店が立ち並ぶが、ほとんどの店は通りから奥まった一室に、盗掘された石彫をならべている。違法と知ってか知らずか、こうした盗掘品を買い求める観光客はあとを断たない。このあたりの住民は、代々盗掘を重ねてきたせいか、知識も豊富で、仏教遺跡のどういう場所に金目のものがあるのかよく知っており、仏塔や祠堂がまずねらわれる。遺構は一度破壊されると、その部分から徐々に崩壊していく。また濫掘が安定していた土層を攪乱するためか植物の繁茂がはげしい。植物の繁茂も遺構崩壊の要因のひとつである。

次にあげられる人為的要因は、保存の処置を行わない不用意な発掘調査である。遺構は土に埋もれたままの状態では壊れにくい。遺構を露出させることは盗掘も同じだが、規模が大きいだけに遺構に与えるダメージは大きい。また発掘調査は地面を掘り下げる行為である。発掘区に適切な排水設備を設けないと、雨期には遺跡が水につかり遺構を傷める。保存の目途がない発掘調査はまさに遺跡破壊といってよい。現在、この地域で行われている発掘調査は、一部の例外をのぞいて、十分な保存措置がとられてはいない。

もちろん、地域住民の生活のなかで破壊されていく場合も少なくない。たとえば、山間部の遺跡では遊牧民のキャンプに使われる。放牧された動物が遺跡を荒らしたりすることも多い。平野に立地する遺跡では、周辺住民の生活に関係して、破壊がすすんでいる。

この状況に加え、近年新しい破壊の要因が加わっている。地域開発による破壊である。パキスタンにおける経済発展にはめざましいものがあるが、ガンダーラ地域も例外では



写真2 盗掘風景

なく、都市開発・農村開発が遺跡の破壊に深く関わっている。都市部では急速な市街化によって多くの遺跡が失われつつある。例をあげると、ペシャーワル博物館蔵のカニシカ王の舍利容器が出土したシャージキデリー Shah-ji-ki-dheri 遺跡は、市街地に吸収されて、現在では正確な場所さえも不明である。また建設工事にともなう多数の遺跡が調査されないまま破壊されている。農村部では、遺跡の石材を自分の住宅に使っている例をよく見かける。人口増にともなう住宅の需要が増えて当然資材も不足してくるが、遺跡は格好の石取場である。マウンド状の遺跡が耕地開発のため、トラクターで削平されてしまう例も数多い。スワビ県のトゥルランディ Turlandi 遺跡は、先史時代からイスラム初期までの大きなマウンドであるが、遺跡近くの橋と道路の建設用の土取場となり、この10年間で3分の1の大きさになってしまった。

盗掘による破壊の他、この新しい要因が加わって、ガンダーラ遺跡はまさに消滅の危機に瀕しているといっても過言ではない。

4 遺跡の調査と保存の歩み

ここで、ガンダーラ遺跡の調査と保存の歴史をツーリズムと関連づけて振り返っておきたい。

ガンダーラ、とくに仏教美術が世界中に注目されるようになったのは、19世紀に入ってからである。ガンダーラ美術は欧米の美術愛好家を魅了し、多数の石彫が各地で掘り出され、ヨーロッパにもたらされた。インド亜大陸はイギリス植民地時代で、このとき「発掘」の主体になったのはイギリス人の行政官や陸軍の工兵隊であった。彼らの興味は石彫であり、仏塔の中に納められた舍利容器であり、遺構には目もくれず美術品を掘り出した。

イギリス人の間にこのような蛮行に対する反省が生まれ、本格的な学術的な調査が行われるのは19世紀も末になってからであるが、その主体となったのはインド政府考古局 (Archaeological Survey of India 以下 ASI) である。カニンガム A. Cunningham やマーシャル J. Marshall など高名な考古学者がタキシラ Taxila やタクティ=バビ、ジャマルガリなどの遺跡で、積極的に学術的な調査と保存修復を試みた。とくに注目すべきは、タキシラにおけるマーシャルの事業である。マーシャルは遺跡を発掘調査し報告書を刊行したばかりでなく、保存工事を行い、出土遺物の収蔵と展示のための遺跡博物館 site museum をたて、遺跡には管理人をおいた。さらには見学者のための遺跡ガイドブック “Guide to Taxila⁵⁾” の出版まで行っている。ここには、現在も学ぶべき遺跡の調査と保存のプロセスが示されている。マーシャルが率いる ASI は、明らかに遺跡保存とツーリズムの関係を考えていたらしく、インド中部の仏教遺跡サンチー Sanchi などの遺跡でも同様の事業を行っている⁶⁾。19世紀のイギリスでは、文化遺産を対象としたツーリズムがすでに一

般的になっていたのだが、ASIがツーリズムをどのように考えていたのは興味深い研究対象である。ただ、文化遺産を活用する対象として、主として在印ヨーロッパ人あるいはインド人エリート層を想定していたことは確かで、地域に住むインド人は対象でなかったことは明らかである。また、ASIはガンダーラ遺跡の詳細な分布調査の必要性を認識し、マルダーン周辺で調査を試験的に実施したことも注目される⁷⁾。

1947年のインド・パキスタンの分離独立後、調査と保存の中心となったのはパキスタン政府考古博物館局 (Department of Archaeology and Museums 以下 DAM) であるが、新生国家がイスラム共和国ということもあって、モヘンジョダロ遺跡のほかは、イスラム時代の遺跡⁸⁾の修復に重点が置かれ、仏教遺跡を中心とするガンダーラ遺跡には関心が集まらず、資金不足もあって本格的な保存事業は行われなかった。

1950年代おわりからは、外国からの調査隊の活動が注目される。イタリア隊と日本の京都大学隊が精力的に調査を進めることになる。イタリア隊は中遠東研究所 IsMEO が、ガンダーラ北部のスワート地方で活動し、ブトカラ Butkara など注目すべき遺跡の発掘を行うとともに、遺構を保存整備し、出土遺物を収蔵・展示する遺跡博物館としてスワート博物館をつくった。これらは現在もスワート地方の重要な観光資源となっている。独立前に ASI が行った手法に準じているが、保存修復の技術的には明らかにイタリアの手法を踏襲している。

いっぽう京都大学隊 (隊長・水野清一教授、樋口隆康教授) は、1960年代にガンダーラの中心部シャーバズガリ Shahbazgarhi 周辺の遺跡を発掘した。チャナカデリー、メハサンダ、タレリ遺跡である。これらは規模も大きく重要な遺跡であり、発掘調査ではさまざまな成果がえられた。発掘調査後は保存対象指定遺跡 Protected Monument として番人が常駐することになったが、具体的な保存の措置はなにもとられず、残念ながらこれらの遺跡の状態はよくない。さらにいうと、調査後の保存と活用についての展望もあまり具体的ではなかったようだ⁹⁾。その背景には、発掘調査の経費は支出されるが、保存と活用は「学術調査」の範囲外とする、日本の学術調査における制度的な問題があった。

同時期にペシャーワル大学が、チャールサダ周辺やスワートで重要な発掘調査を行なったが、予算にも限りがあり、本格的な保存事業は行わなかった。パキスタン人による保存事業としては、英領時代に整備されたタキシラなどの遺跡の維持管理を DAM が細々と続けられているに過ぎなかった。

1990年代に入ると、ようやくパキスタンでもガンダーラ遺跡に関心が集まるようになった。これには明らかにツーリズムの影響があり、1985年の政府5カ年計画でもガンダーラ遺跡の観光資源としての価値とその開発がふれられている。観光に関する統計で信頼できるものは少ないが、たとえば代表的な博物館のひとつであるペシャーワル博物館の入場者は、1985年に3万人であったものが、1990年には8万に増加している¹⁰⁾。日本からの観光客も急増した。1970年代までの日本からの観光客は、ほとんどが登山・トレッキ

プロジェクト名	時期	実施主体	概要
マルダーン博物館設置	1990年	州政府	建物は完成したが未だ開館せず
シャバズガリ観光施設設置	1992年	マルダーン県	アショカ王法勅前の休憩施設
タクティ＝バヒ総合開発プロジェクト第1期	1994年～	中央政府考古博物館局	世界遺産登録遺跡の総合開発計画、ビクター用施設整備、一部遺構保存
北西辺境文化の道プロジェクト	2000年～	州政府、IUCN パキスタン支部	ガンダーラー帯の史跡公園化構想（ペーパーワーク）
タクティ＝バヒ総合開発プロジェクト第2期	2000年～	中央政府考古博物館局	3の第2期、遺跡の発掘調査と保存に重点がおかれる
ゴルガトリ・プロジェクト	2001年～	州政府、IUCN パキスタン支部	ベシャーワル旧政庁の拠点施設整備、庭園、ショッピングセンター

表1 ガンダーラ遺跡関係・近年のプロジェクト

ングであったが、ただ、1980年代からは、いわゆるシルクロードブームの影響と、1984年のカラコルムハイウェイ（カシュガルとイスラマバード間）の開通もあって、ガンダーラ地域への入り込みが増えた。しかし、2001年9月11日のニューヨークにおけるテロとその後のアフガニスタン空爆を巡る一連の国際情勢の動きは、パキスタンの観光産業に大きなダメージをあたえた。まだ、その業績の回復のきざしは顕著には見られない。

ともあれ、1990年代にはいると、こうした状況下、DAMと北西辺境州政府、それにベシャーワル大学の3者が積極的に調査活動をはじめた。この他、たくさんの遺跡保存のプロジェクトが提案された。主なものをまとめたものが、表1である。遺跡自体の保存整備とそのなかで、もっとも規模が大きいものは、1993年から開始されたDAMによるタクティ＝バヒ遺跡の整備事業である。タクティ＝バヒはマルダーン県にある仏教寺院址であるが、尾根に沿って大小の遺構がならぶ大遺跡であり、ユネスコの世界遺産リストに登録されている。19世紀の終わりから今世紀のはじめにかけて、ASIによって発掘調査され、一応の保存工事も行われた。しかし1947年以降は、小規模の整備が行われただけで、ほとんど手が付けられていなかったのである。この保存事業では、遺構の修復から見学者のための施設の整備、さらには植栽計画も含んだマスタープランが作られ、それに従って事業が進められている。遺跡整備の本格的なマスタープランが作られて事業が実施されたのは、ガンダーラ遺跡では独立後はじめてのことである。この他プトカラ、ジャマルガリでも保存事業がすすめられている。北西辺境州政府、ベシャーワル大学も独自の活動を行っているが、発掘調査と分布調査が中心であるが、ベシャーワル大学博物館、マルダーン博物館などの博物館建設プロジェクト、フンドHundなど重要な遺跡での遺跡整備プロジェクトもある。

5 現在の保存事業の問題点

これらの保存整備事業の問題点を、文化遺産管理とツーリズムに関わる政策上のものと技術的なものにわけて指摘しておきたい。

1) 政策上の問題

①有名遺跡重点主義

まず政策的な問題から述べると、遺跡の保存整備事業が、一部の有名遺跡でのみ行われていることがあげられる。分離独立後のDAMによる保存事業も、対象となっているのは、英領時代にすでに発掘整備され、しかも遺跡へのアプローチなどの基盤整備がすでに行われて、ある程度の見学者もある遺跡を選んですすめられている。パキスタンチームによる発掘調査が行われた遺跡の保存整備はあまり行われていない。

②施設建設優先

遺跡自体の保存より、新しい施設の建設にエネルギーがそそがれる。たとえば、先述の3主体とも最優先で取り組んでいる事業が、博物館と記念碑の建設である。ペシャーワル大学博物館は、1983年に構想がまとまり、さまざまな外国の援助をえて1999年完成したものである。問題なのは、ペシャーワル大学は1980年から1997年までに25箇所が発掘調査を行っているが、これらのほとんどが、仏教寺院址の発掘で、基本的な編年のための学術調査というより、大学博物館の収蔵品を収集する目的の調査であった。前述のように、こうした遺跡が発掘調査後に放置されている現状を考えると、博物館の企画がかならずしも遺跡保存に結びついていないことが分かる。また、州政府によるフンド遺跡における整備も、アレキサンダーの記念柱の建設が、主たる内容であった¹¹⁾。

また、有名遺跡については休憩所などの利便施設の建設が優先される場合もある。マルダーン県のシャーバーズガリにはアショカ王の法勅が残されている。マウルヤ朝の版図をしめす重要な遺跡であり、また、観光案内書にもかならず載せられている。ただ、法勅が刻まれた巨石の劣化が深刻な問題として20世紀初めから指摘されていた。この遺跡について、県は、1996年に独自予算でその整備を行うことになったが、じっさいに行われたのは来訪者用の休憩施設の建設のみであった。法勅の保存措置として、DAMの手になる覆屋が完成したのは、その5年後のことである。

③広範に分布する遺跡群の軽視

広範に分布する遺跡に目を配るには、それらの現状把握が必要である。しかし、遺跡の分布調査自体が1993年からはじめられたばかりで、その調査データも十分に整理されていない。もちろん、その保存対策もまったくとられていない。遺跡の価値をたかめ、また遺跡の価値を理解させるためにパイロット的な事業はぜひ必要だが、広範に広がる遺跡の保存について明確なヴィジョンが示されていないことは、片手落ちといえよう。

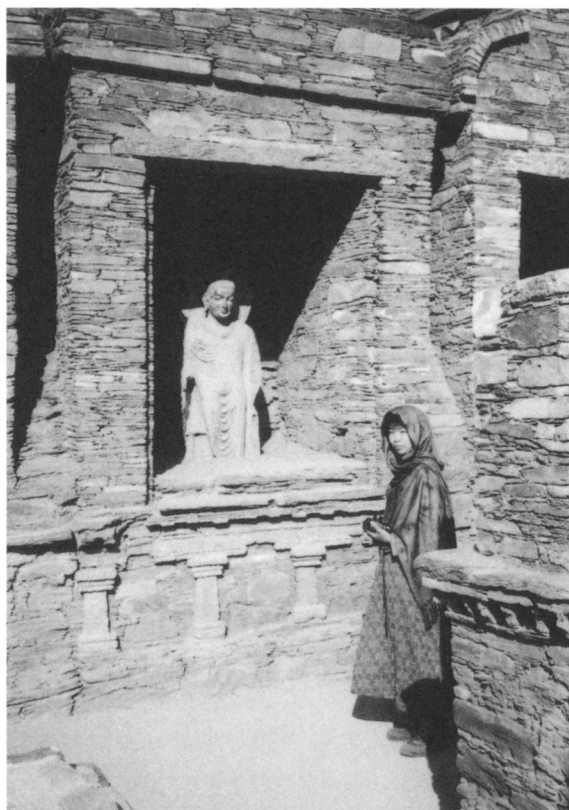


写真3 タクティー＝パヒ遺跡における仏像のプレゼンテーションと来訪者

これらは日本をはじめ、どの国にも共通することだが、地味で時間のかかる事業は敬遠されがちである。ましてや、短期日に成果（具体的にはツーリズムの資源としての成果）が求められているので、なおさらである。さらに行政機構上の問題がくわわる。

④行政機構の未整備

上にあげた3つの事業主体（DAM、州政府、ベシャーワル大）は、それぞれ独自に事業を進めていて、相互の連携はあまりない。パキスタンの行政機構は、基本的に州単位の地方分権であるが、文化行政は中央政府の力が強く、とくに文化財行政は中央政府主導であった。ただ、1990年代後半からは、文化財領域でも地方分権化が進められていて、各州（パキスタンは言語州4州からなる）に文化財主事 Directorate of Archaeology が置かれて、文化財行政を分担することになった。中央と地方の役割分担は、民族対立も絡んで複雑な問題であるが、パンジャーブ州など3州では、中央政府と州政府の役割分担がきめられ、それなりに文化財行政が機能している。ただ、ガンダーラ遺跡の位置する北西辺境州では、発掘された遺物（石彫・土器など）の管理主体、発掘調査のライセンス発行権限、博物館建設の主体などで、中央政府と州政府双方が権利を主張していて、2003

年現在、連邦最高裁で審理中であるが、また結論がでていない。ガンダーラ美術という、観光資源にもなる魅力的な遺物の管理権が問題になっているのである。じっさい、発掘調査でえられた遺物の管理権は中に浮いたままで、トラブルに巻き込まれている外国調査隊もある。

つぎに技術的な問題点は数多くあげられるが、本論文で扱う内容ではなく、他所で詳しく述べているので、ここでは、ツーリズムに関わる事項についてのみ紹介したい。

2) 技術的な問題

①キャッピング

ガンダーラ遺跡では地文様積みと呼ばれる独特の石積みが用いられている。地文様積みは、30～40cmの丸い石と、高さをそろえるための薄く平たい小石を組み合わせた石積みである。この石積み自体はさほど脆弱なものではないが、いったん崩落がはじまると、それをとめることが困難である。そこで破壊面に耐水性のある層で蓋をしてそれ以上の崩落をふせぐ手法がとられ、キャッピングCappingと呼ばれている。キャッピングは崩落防止には確かに効果がある。しかし、耐水性と強度をもたせるために施工が容易なセメントモルタルが多用されており、仕上げの見栄えが悪いこと、修復部分の取り外しが困難なこと、セメントモルタルのアルカリ成分の遺構への影響などが問題となる¹²⁾。

②復元とプレゼンテーション

見学者のためのプレゼンテーションが稚拙である。キャッピング作業にあわせて、必要以上の復元が行われている。オーセンティシティ上問題があるのはもちろんのこと、遺跡の感動的な景観を台無しにしている例も多い。

③記録のストック

文化財の修復に当たっては、詳細な記録を残すことは常識といえるが、とくにキャッピングと復元を急ぐあまり、パキスタンでは十分に行われていない。マンパワーの点で学術的考証が不十分で仕方がない面もある。

④クラフトマンシップの問題

石工の技術が高くない。英領時代には頻繁に遺跡の修復が行われていたが、独立後、DAMのプロジェクトが開始される1993年まで、技術水準を高める機会が少なかったことが影響している。イスラム建築の修復に携わる職人の技量と比較すると、その差は明らかである。

6 ユネスコ日本信託基金によるガンダーラ遺跡保存プロジェクト

こうした状況下、1993年からユネスコ日本信託基金による日本とパキスタンとの国際共同事業「ガンダーラ遺跡保存プロジェクト」がはじめられた。このプロジェクトは、

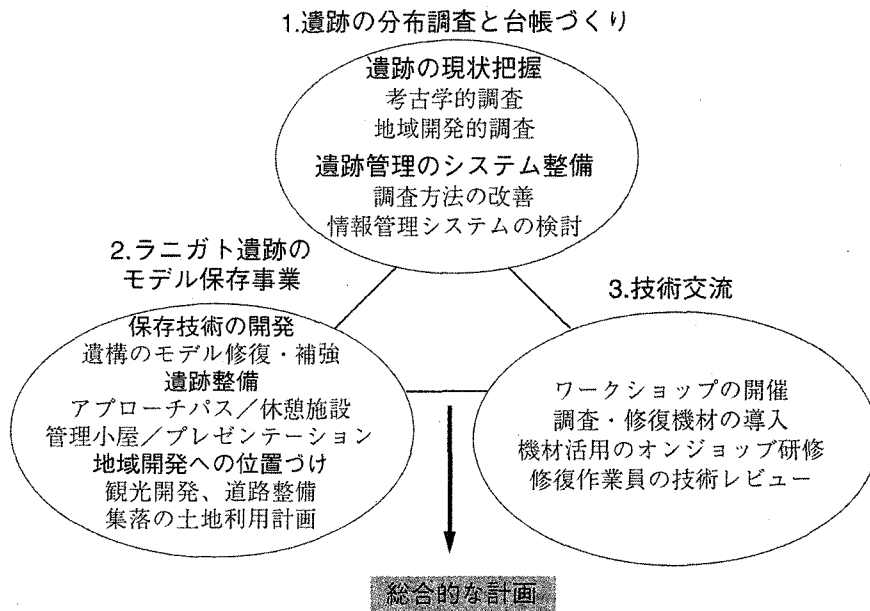


図2 ガンダーラ保存のプロジェクト

「モデル保存修復事業」、「分布調査とドキュメンテーション」、「技術交流」の3つの事業をすすめるなかで、危機に瀕しているガンダーラ遺跡の救済のために、政策的、技術的な提案、観光開発など地域開発における遺跡保存の位置づけをふくめた総合的な保存計画をつくることにある。

プロジェクト開始当初は、日バ両国の足並みがそろわないところがあったが、1995年秋には、詳細なワークプランを作成し、ベシヤーワルに事務所を設け、必要な機材をインストールした。そして、1996年秋から実質的な作業に入った。筆者はこの時点からプロジェクトのマネージメントを担当している。その成果の一部を紹介したい¹³⁾。

1) ガンダーラ遺跡の分布調査からの知見

保存計画を考えるに当たって、まず必要なことがらは、ガンダーラ遺跡の正確な現状把握である。遺跡破壊の主な原因としては、まず盗掘、そして雨や風、つよい日差しなどの気候条件、放牧などをあげられる。これらは現在でも大きな要因であるが、近年あたらしい要因—急速な地域開発が加わり、数多くの貴重な遺跡が、農地開墾のため、道路や水路の建設のために破壊されていることはすでに述べた。まずこうしたガンダーラ遺跡の実状を正確に把握しなければならない。ここで、モデル事業の第1番目の作業を、分布調査とした。

このプロジェクトでは、地域を限定し、実験的な分布調査とドキュメンテーションを

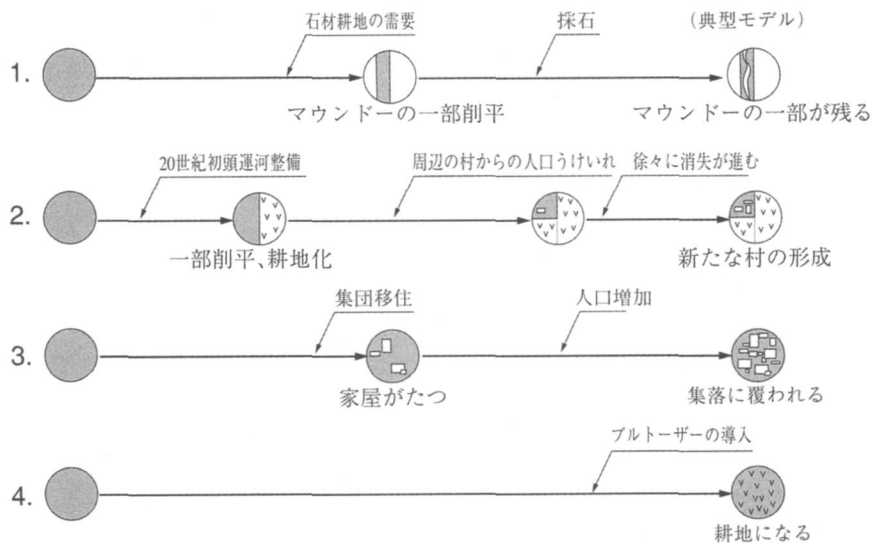


図3 ガンダーラ遺跡消失のパターン
平井奈美作成。注14による。

行っている。1996年秋に調査対象とした地区は、7世紀に当地を訪れた玄奘三蔵が、仏伝にいう弾多落迦山に比定したカラマール Karamar 山とその周辺で、古代ガンダーラの中心であり、じっさい数多くの遺跡が分布する。そして近年、地域開発が急速にすすんでいる地域でもある。この地域を対象に、遺跡の形状、遺物の表面採集などの考古学的な調査の他、土地の所有形態・利用形態、破壊の要因、道路・水路などのインフラストラクチュアの整備状況など、地域開発の視点からの調査も行った。踏査した遺跡は新発見のものもふくめて80箇所である。調査で得られたデータは、ペシャーワルのプロジェクトオフィスで、データベース化の作業中である。調査結果の概要は、すでに報告しているが¹⁴⁾、その要点をまとめると、次のようになる。

- ・多くの遺跡が、さまざまな方法で集落の住民の生活に活用されていること。
- ・現在でも、盗掘が主要な破壊要因となっている遺跡が多いこと。
- ・遺跡の保存状態と、この地方に住むパクトゥン Pukhtun 人の部族慣習法パクトゥヌワレイ Pukhtunuwalai による土地共有制度とがふかく関係していること。
- ・遺跡の消失過程は、地域開発との関係でいくつかのパターンがあること (図3)。
- ・英領時代から耕地化され始めた遺跡の消失の速度は遅いが、近年の開発による破壊は、トラクターの導入もあって急速であること。
- ・遺跡の保存を考えるに当たっては、住民生活と遺跡の共存のあり方を考える必要があること。

などの点が、調査から明らかになった。

2) 技術交流

分布調査とモデルプロジェクトは、日本とパキスタンの専門家の協力によって進められている。そのプロセス自体が技術交流であるといえる。また、調査修覆用の器械についても、プロジェクトで使うものをインストールし、オンジョブでトレーニングを行っている。

1996年11月には、ガンダーラ遺跡保存のための国際ワークショップを開催した。このワークショップは、パキスタンで進められてきた保存事業をレビューし、またプロジェクトを進めていく上で明らかになってきた問題点を、検討しようとするものであった。ガンダーラ遺跡の保存に関して国際的な議論の場をもつこと、とくにオンサイトでそれを行うことは、まったくはじめてのことであった。パキスタン側からは11名、日本からは9名の専門家が参加し、じっさいに問題のある遺構を観察しながら、活発な議論がたたかわされた。このなかでも、DAM担当者から、「ビジターのために施設整備と積極的な遺構の復元が必要である」との意見がでた。

7 ラニガト遺跡におけるモデルプロジェクト

1) 調査の経過と遺跡の概要

このプロジェクトでもっとも力を入れているのが、ラニガト遺跡におけるモデルプロ



写真4 ラニガト遺跡

ジェクトである。他の遺跡の模範となるような保存、管理、そして活用を行おうとするものである。ラニガト遺跡はブネール県に所在し、1983年から京都大学隊（隊長西川幸治教授）が10年間発掘調査を行ってきた仏教寺院址である。平地との比高約200mの丘陵上に、南北1100m、東西650mにわたって伽藍が広がり、ガンダーラでも屈指の規模をもつ大遺跡である。

京大隊が発掘調査を行ったのは、その中心部分、東西約130m、南北約230mに過ぎないが、約90基の仏塔など多数の遺構、石彫類、貨幣、カラーシュティ刻文のほか、寺院址には珍しく、大量の土器が出土した。土器の編年作業から、遺跡の最初期をA.D.1世紀後半以降、最終期の下限をA.D.6世紀とする年代観をえている。遺構のなかでとくに注目されるものとしては、主塔の「増広」¹⁵⁾と増広以前の基核となる小塔、要塞を思わせる長大な石積みと迫り持ちアーチのトンネル、ストゥッコで装飾された仏塔の基壇などがあげられる¹⁶⁾。ただ、発掘調査後プロジェクト開始までは、本格的な保存事業は行うことができず、崩落危険箇所をセメントモルタルで補修する応急的な処置だけを行ってきた。また、地元の村人がヤギやウシの放牧に使うほかは、一部の研究者や美術愛好家、それに盗掘屋がおとずれるのみであった。

2) 保存活用上の問題点

ラニガト遺跡には、遺跡を保存し地域開発の中に位置づけていく上で、さまざまな問題点がある。まず、技術的には次のような問題点がある。

- ・遺構の素材が花崗岩で非常にもろい。
- ・遺構の多くが先述の地文様積みである。上部から雨水が浸入すると、コメ土が流失し、積み石が安定を失って崩落しやすい。一度崩落がはじまると、それを止めることがむずかしい。
- ・伽藍には石貼りの床がつくられていた。ところが、残存床面の周囲の土の流失によって、敷石が安定を失って、破壊されやすい。
- ・雑草などの植物による劣化が進んでいる。
- ・遺構側面の漆喰や美しいストゥッコが剥落しやすい。
- ・大多数の遺構が盗掘の被害を受けており、その盗掘坑から崩壊が進んでいる。大きな盗掘坑のある仏塔のドームやドラムは、崩壊防止の補強がむずかしい。

遺跡の積極的な活用を考える上での問題点としては、次の2点が上げられる。

- ・麓の集落から遺跡まで、急な山道を登らなければならない。
- ・幹線道路から麓の村までの道路も、十分に整備されていない。

さらには、次のような管理上の問題も加わる。

- ・遺跡がガンダーラ平野の周縁に立地するため、監視の目が行き届いていない。政府の保存対象遺跡とされているが、予算不足のため管理人がいない。

・ながくパキスタン政府の直接支配を受けない部族支配地域 Tribal Areaであったため、住民は法律より独自の慣習法に従うことが多く、プロジェクトを進める中で、住民とのトラブルがおこること珍しくない。

いささか皮肉っぽく聞こえるが、ラニガト遺跡には、ガンダーラ遺跡の保存と利活用に関して、考えられるすべての問題があるといってよい。ただ、ここでの作業と研究を通して得られるであろう解決策は、ひろく他のガンダーラ遺跡にも応用が可能であると考えた。この意味で、ラニガト遺跡におけるプロジェクトをモデル・プロジェクトと名づけているのである。

3) 保存活用の計画

こうした問題点をふまえて、ラニガト遺跡における作業をはじめる前に、日パの担当者間で基本方針を確認し、遺跡保存のマスタープランと年次計画を作成した。

まず、管理と活用に関しては、現行プロジェクトの問題点で述べた施設整備重点主義への反省から、遺跡自体の保存を最優先にし、必要最低限の施設を整備することとし、こうした施設は、保存修復の作業のために作るものを、事業終了後に転用することとした。

活用のための計画としては、遺跡を訪れた人びとが遺跡の意味をよく理解できるようにプレゼンテーションを行うことにしている。遺跡の景観に調和したサインボードの設置や、管理用施設を活用したオンサイト・ディスプレイを計画している。

たとえば立地条件の問題に対して、プロジェクトでは、遺跡での保存修復のための資材運び上げに使うアプローチパスを建設した。その3分の1は四輪駆動車による登行が可能である。作業終了後は観光用に使用できるように、安全柵や休憩施設の整備を予定している。また、幹線道路から麓の集落までの道路整備について、地方政府の担当部に働きかけを行い、1998年中に舗装工事の内諾をえたが、その後の政治情勢の変化もあり、まだ着工されていない。

じっさいの保存修復については、ベーシックな修復のほかに、いくつかの実験的施工を通じて、上にあげた困難な課題に対して、新しい技術を開発しようとしている。ここでいう技術は、いたずらに理想的なものをとめるのではなく、プロジェクト終了後も、現地技術者が、援用できうる技術を開発すること。プロジェクト、高度技術や高価にすぎない材料、工法はとらず、できるだけ現地調達できる材料を使い、現地の技術者で管理・指導できる工法をとることにしている。現在もっとも重要と考え、力を入れているのは、遺構のキャッピングの改良である。従来、パキスタンで行われてきたキャッピングの方法に問題があることは、指摘した通りである。プロジェクトでは、現地材料と日本から持ち込んだシリコン系樹脂を組み合わせた新しいキャッピング法の開発を試みている。

改良されたキャッピングを主体とした遺構の保存修復、ストウッコで装飾された小塔

の修復と覆屋の建設、石貼り床面の修復などは、1年半ほどの協議期間をへて、1997年から具体的な作業に入り、主塔院など約2,000㎡の遺構の保存修復を終えた。

8 保存修復における取り組み

ここでは、プロジェクトで行ってきた作業のうち、本論文に関わるもののみを取り上げて紹介したい。

①覆屋の設置

覆屋はガンダーラ遺跡に独特の方法ではないが、パキスタンのように厳しい気候下ではとくに効果的である。石積み遺構の保存に加えて、ストゥッコで装飾された遺構の保存には、ストゥッコ自体の劣化防止とストゥッコと下地の石積みの分離／剥落防止に有効であると考えられる。じっさい、タクティ＝バヒ遺跡やタキシラ遺跡などで覆屋が設けられ、それなりの効果が見られる。ただ、覆屋の設置が景観に及ぼす影響、覆屋の構造物が遺跡を壊すことが問題である。とくに丘陵上に立地するラニガトでは、強風に耐えるための強度が求められる。また、複雑に入り組んだ遺跡の中で、遺構を痛めることなく覆屋を建設することは難しいが、ラニガトではストゥッコの塑像で装飾された小塔で、塑像の修復後、覆屋をすでに設け、雨水や日照に対する効果が確かめられた。

②盗掘抗の充填と補強

先に触れたとおり、多くの遺構に盗掘坑が穿たれ、内部が中空になっている。これまでは盗掘坑に砂や粘土を充填し、それ以上崩壊が進むのをくい止めてきた。しかし、一部の遺構は不安定な人工地盤上に立ち、他の遺構を覆うように築かれており、重い材料を充填材に使うことには問題があった。次のフェイズでは EPS ブロックなどの軽量の素材を充填できないか検討中である。

③遺構の復元

今回のプロジェクトでは、遺構の復元を必要最低限（ある程度の復元を行わないと崩壊が進むおそれがある場合など）にとどめることを基本方針とした。ただ、将来的に遺跡保存に責任をおうべき住民の遺跡に対する理解をえるため、ある程度のプレゼンテーション用の復元はやむをえないと考えている。ガンダーラ遺跡においては、寺院建築を荘厳するところの彫刻が持ち去れている場合が多く、寺院盛期を思い浮かべるのは困難なのである。ただ、パキスタンでは復元に関して学術的考証が不十分でプレゼンテーション上も問題があるものが多い。プロジェクトでは、オーセンティックな手順を踏んで、ピンポイント的な復元（具体的には増広の基核となった小塔、奉献小塔のひとつ）を考えている。

こうしたじっさいの作業のほか、プロジェクトの進め方についても検討してきた事項がある。

④保存修復の記録作成

ラニガト遺跡では、on-job形式でトレーニングしながら、保存修復箇所について、わが国と同様の精度の修理記録を残すことを目標にしている。しかし、パキスタンにおける技術者の能力を考えると、一般的には同水準の記録を残すことは現実的に難しい。また、記録作成に時間をとられているうちにさらなる崩壊が進んでしまうことも現実起こっている。ラニガトでは、プレゼンテーションのために、遺跡の修復箇所を鉛板で示す方法をとったが、保存修理記録の不備を補う意味もあった。

⑤石工の技量の向上と地域住民の参加

ガンダーラ遺跡の修復に携わる石工の技量は概して高くない。ラニガトで作業している石工たちも例外ではない。ただ、これには理由があった。プロジェクトでは、遺跡分布調査と並行してガンダーラ地域の石工に面接調査を実施した。高齢の石工たちは、英印時代にタクティ＝バヒヤタキシラの保存修復に参加した経験があるものもあり、それなりの水準の技術をもち、保存修復に対する理解もあった。ただ、分離独立後には、その腕を振るう機会もなく、技術が継承されることもなかったのである。プロジェクトは、4年の継続的作業を通じて半世紀のギャップを埋める役割をも負っている。

また、この事業は地域の住民の協力なしでは成り立たない。じっさい1983～1992年の発掘調査では、一日あたり最大で400人の住民を人夫として雇った。このプロジェクトでは、作業がデリケートなこともあって、最大20人の雇用としている。保存修復がはじまって7年が経過するが、そのほとんどが、ある程度の技量に達してきて、そのなかには、他の遺跡の現場にフォアマンとして招かれるものもでてきた。ただ、地域住民のなかで、ラニガト遺跡を自分たちの遺跡として認識するまでにはいたっていないと思われる。

⑥遺跡の活用とツーリズム

プロジェクト前のデータがないので、はっきりした数字の比較はできないが、アプローチが整備されたこと、かなりの保存修復がすすんだこと、いくつかの旅行ガイドブックで紹介されたことで、遺跡への来訪者が確実に増えている。近隣の集落の小学生の遠足のコースにもなった。2002年のデータによると、年間約3000人が訪れた。うち外国人は80人であった。この数字が多いのか少ないのか、判断できないが、こうした来訪者の存在が、地域の住民の遺跡に対する意識に影響をあたえているのは確かであろう。

⑦プロジェクトのモデル性

ラニガト遺跡は膨大な数のガンダーラ遺跡のなかのわずかな1遺跡にすぎないし、またラニガト遺跡のなかでも限られた遺構の手当が行なわれているにすぎない。その意味で、国際協力の中で、いかにモデル性をもつかが重要であると考え。限られた予算とマンパワー、そして時間のなかで、修復が完了した遺跡そのものだけにアウトプットとしての価値をもとめるのは難しい。それより、事業の中で開発された技術こそ、評価され、継承されていくもの考える。

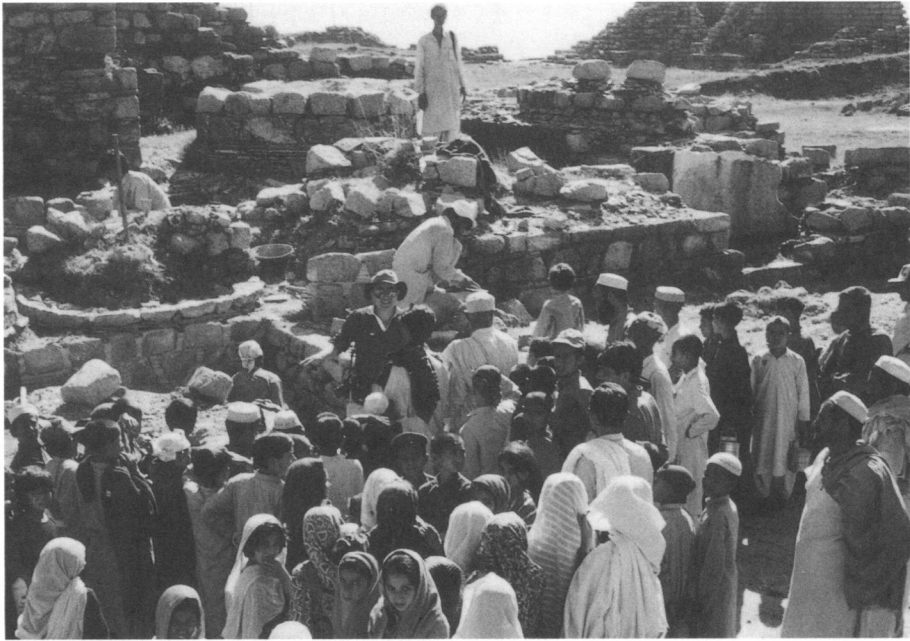


写真5 小学生の修葺現場見学

9 まとめ——ガンダーラ遺跡における文化遺産管理とツーリズムの課題

以上、ユネスコプロジェクトの経験から、ガンダーラ遺跡における問題点を述べてきた。最後に、それらをまとめ、これからの課題を明らかにしておきたい。

まず、個別の遺跡の保存について問題点をまとめると、

- ① ツーリズムが保存整備事業の目的化してしまう場合が少なくないこと
- ② 施設整備が優先され、実際の保存修復が後回しにされる場合が多いこと
- ③ 遺跡の保存活用技術水準が低いこと

の3点がまずあげられる。とくに①、②は、内外からの事業の資金獲得のための、ジャスティフィケーションを得られやすいことに問題がある。遺跡保存と整備には、バランスのとれたマスタープランが必要であることはいうまでもないが、パキスタン国内でも、外国からの援助でも、施設整備への予算配分に重点が置かれる構造的な問題が背景にある。③については、保存活用分野での適正技術の開発が求められる。ラニガト遺跡での事業も、この試みのひとつである。

また、保存事業が行われているのは一部の遺跡で、他にも数多く遺跡が存在し、それぞれに地域の遺産として重要である。ただ、

- ⑤ こうした各地に散在する遺跡はほとんど放置されていること

- ⑥ガンダーラの場合には、タキシラやタクティ＝バヒなどの有名遺跡が、ツーリズムの対象となることで、ガンダーラ美術への関心が高まり、周辺の無名遺跡での盗掘がすすむ場合もしばしば見られること

の2点は前世紀から現在まで変わるところがない。

長期的にみると、個別の保存整備事業を通して、住民の遺跡にたいする意識が変わるのを待つしかないが、短期的な対策として、広域的な管理システムの構築を行う必要がある。現在タクティ＝バヒ遺跡が世界遺産に登録されているが、ガンダーラ全体を歴史的地域にとらえ、登録の範囲を周辺地域に拡大しようという動きがある。プロジェクトのテクニカルプロポーザルにも記述した。現在の保存管理の体制を考えると、むずかしい面もあるが、ぜひ実現したい対策である。

注

- 1) Masui Masaya ed., Terminal Report, UNESCO/Japan Trust Fund Project for the Preservation of Gandhara Monuments, 1995-1999, 2000.
- 2) Annual Report, Archaeological Survey of India, Frontier Circle, vol. 17, 1910 など。
- 3) Saeed-ur-Rehman ed, Archaeological Reconnaissance of Gandhara Monuments, 2000. にまとめられている。
- 4) Saeed-ur-Rehman, Ashraf Khan, Abdul Azim, General Report regarding Exploration, Protection and Conservation Carried out in the Gandhara Region by Different Institutions, 1996.
- 5) John Marshall, A guide to Taxila, Calcutta: Superintendent Govt. Printing, India, 1918.
- 6) John Marshall, A guide to Sanchi, Calcutta: Supt. Govt. Print., India, 1918 など。
- 7) 前掲書2)。
- 8) モスクや聖者廟の修覆は宗教喜捨省 Ministry of Religious Affairs, Zakat & Ushr の管轄で比較的資金には恵まれている。
- 9) 西川幸治, 増井正哉, 植田英輔『ガンダーラにおける仏教寺院の復原と整備に関する調査研究——シルクロード学』Vol.9 (シルクロード学研究センター, 2000年) に現況とその問題を報告している。
- 10) ペシャーワル博物館の会計報告による。
- 11) ガンダーラ遺跡の例ではないが、ペシャーワル旧市街にあるムガル時代からの政庁跡ゴルカトリ Gor Khattri 遺跡では、州政府とペシャーワル市当局による遺跡内の博物館建設・ムガル風庭園の設置による振動と荷重増, またこれらの施設と周辺の住宅へ供給するために地下水のくみ上げが原因で、肝心の遺構が不同沈下を起こし崩壊の危機に瀕している。
- 12) 西浦忠輝, 増井正哉, 海老澤孝雄「ラニガト遺跡における新しいキャッピング法の開発を実験施工」『第1回アジア文化財保存修復研究会報告書』東京国立文化財研究所, 1997年。
- 13) 増井正哉「ガンダーラ仏教遺跡の保存と修復——パキスタン・ラニガト遺跡での取り組みから」『建築雑誌』第1470号, 2000年。
- 14) 増井正哉, 平井奈美他「パキスタン・ガンダーラ地域における地域開発と遺跡保存に関する調査研究 その1～4」『日本建築学会大会学術講演梗概集 (関東)』, 1997年。
- 15) ガンダーラに限らず南アジアの仏教寺院では、既存の塔を覆うように新しい塔を造って規模を

大きくする例がよくあり、「増広」と呼ばれている。ガンダーラにおいて増広前の塔がほぼ完全な形で見つかったのは珍しい。

- 16) 発掘の成果は西川幸治編『ラニガト（ガンダーラ仏教遺跡の総合調査，図版編）』京都大学学術出版会，1994年にまとめられている。

